審査を終えて

委員各氏からのメッセージ

◇ ◆ ◇

総評

◇審査委員長◇
元大阪府立産業技術総合研究所所長
南　努

20世紀後半のある時期、日本は「Japan As No.1」と言われるほど輝いていたことがあった。そういう状況が達成された背景をマクロにみれば、エレクトロニクス産業と自動車産業が創出した資産で他の分野も活性化できたのではないかと考える。

今、その一角が音を立てて急速に崩れつつある。電気自動車（EV）が本格的に世の中に普及すればエンジンが不要になり産業構造の一大変革が起きると予想される。こうした流れを受け、今こそ新しい産業の台頭が期待される。

学生の提案による「キャンパスベンチャーグランプリ」は、そういう側面から見た時、非常に時宜にかなったものと言える。このキャンパスベンチャーグランプリでの提案をもとに、すでに50社を超える企業が誕生していると聞く。これは大変な実績で今年の提案の中からも、さらに新しい企業が起こることを期待している。

優秀な提案多数 起業に期待

今年は28校から233件の応募があった。その中から18件が1次書類審査を経てプレゼンテーションによる2次審査に臨んだ。昨年は2次審査提案の内、すでに起業しているものや起業の準備が整っている案件が多く、優秀な提案内容とともに高く評価された。

今回はすでに起業、あるいは起業準備の整ったものが少なかったことが残念だった。しかし、こうした中もビジネス部門で最優秀賞を受賞した京都大学の品川皓亮さんらの「Smile Dish～外国人旅行者とランチ留学～」の提案は、すでにWeb上での実績を踏まえ、すぐにでも起業できる準備が整っている。観光地としての京都という地の利を生かし、学生側は外国人と食事をしながら実践的な英語の習得ができる。また外国人旅行者側は安い利用料で安心して食事ができるというユニークな発想が高評価を得た。

一方、テクノロジー部門で最優秀賞に選ばれた大阪大学大学院工学研究科の中山智詞さんらの「〝内視鏡医療の新しいカタチ〟レーザーを用いた新・ドラッグデリバリーシステム」は、がんの患部にだけ薬剤を投入しレーザーの作用により薬効を高めることを狙った。工学からの提案を医学と結ぶ「医工連携」を進めることができれば、すぐにでも現場で応用できる技術提案として高く評価された。

また、優秀賞に選出された和歌山大学システム工学部の堀切川和也さんらの「Photrip～新感覚のトラベルマップ共有～」、立命館大学理工学部の「教育用ロボット制御モジュール開発〝ROBOTICS：NOTES〟」もユニークな提案であり高評価を得た。

その他の提案に対し詳細な言及をしないが、大変優秀なプランが多く楽しく審査することができた。これらの提案の中からベンチャー企業が生まれ、日本経済をけん引するまでに発展してくれることを願っている。

テクノロジー部門

高知工科大学大学院客員教授
前川 洋一郎

内容レベル高い

本年も楽しくワクワクした気分で審査でき幸せであった。テクノロジー部門は産学連携をテーマにレベルの高い内容が多く、ビジネス部門はITを活用したビジネスモデルが増加。日常生活や都市空間のニーズに応える内容が多く散見できた。新規独創性や事業性、市場性においても手堅い内容が多い反面、やや跳びはねたものが少なく感じた。

ただ、プレゼンの表現力は例年になく上手で歯切れ良く気持ちよかった。

一方時節柄、創エネや省エネ、脱エネに関する内容を期待したが今回は見られなかった。さらに注文を付けるとすれば、事業化にとって重要な商いの流れやもうけの仕組みについて、考えに考え抜いて欲しかった。若さだけではまだまだ甘い。

NPO法人IT百撰アドバイザー・クラブ
アドバイザー
所 喜代春

起業意志を体感

相変わらず経済の先行きが不透明で暗いニュースも多い中、積極的にベンチャーを起業しようとする若者のエネルギーを体感する審査会だった。今年は就職戦線の状況を反映してか、起業に対する強い意志が感じられ実現可能性の高いものが多かった。テクノロジー部門ではIT関係のプランが相変わらず低調だった。収益計画に関しては、全体的にコストや経費を過小評価しており、プランの具体化にあたっては、専門家のサポートを受ける必要がある。最優秀プランは、本年もテクノロジー部門とビジネス部門から1件ずつ選定されたが、どちらも日常の経験あるいは研究の中から新しい適用分野を発見し、具体的で分かりやすいプランを構築している点は共通しており、実現可能性が極めて高い。

重要な将来予測

テクノロジー部門の担当としては、昨年の審査より技術テーマが多かったことは喜ばしかった。ただ既存の技術のみに乗っかる傾向が少々見られた上、専門分野での新規性の検討に時間がかかる提案もあった。

多くの提案書でさまざまな工夫の努力が感じられ、プレゼンテーションも全体的にうまかったと思う。

今後の要望事項としては、低価格化以外の差別化、事業化の強い意志、類似・競合の調査、独りよがりでない発想、分かりやすいネーミング、そして事業化するであろう正確な将来予測にあると考える。

元プランのブラッシュアップも含めた新たな挑戦を期待したい。

メガチップス取締役執行役員第1事業部長
古都 哲生

強い熱意伝わる

今年の審査もビジネスプランと技術ベースプランの違いにおいて優劣判断が難しかった。テクノロジー部門の担当として、昨年の審査より技術テーマが多かったことは喜ばしかった。ただ既存の技術のみに乗っかる傾向が少々見られた上、専門分野での新規性の検討に時間がかかる提案もあった。

多くの提案書でさまざまな工夫の努力が感じられ、プレゼンテーションも全体的にうまかったと思う。

今後の要望事項としては、低価格化以外の差別化、事業化の強い意志、類似・競合の調査、独りよがりでない発想、分かりやすいネーミング、そして事業化するであろう正確な将来予測にあると考える。

元プランのブラッシュアップも含めた新たな挑戦を期待したい。

創晶代表取締役社長
安達 宏昭

内容レベル高い

本年も楽しくワクワクした気分で審査でき幸せであった。テクノロジー部門は産学連携をテーマにレベルの高い内容が多く、ビジネス部門はITを活用したビジネスモデルが増加。日常生活や都市空間のニーズに応える内容が多く散見できた。新規独創性や事業性、市場性においても手堅い内容が多い反面、やや跳びはねたものが少なく感じた。

ただ、プレゼンの表現力は例年になく上手で歯切れ良く気持ちよかった。

一方時節柄、創エネや省エネ、脱エネに関する内容を期待したが今回は見られなかった。さらに注文を付けるとすれば、事業化にとって重要な商いの流れやもうけの仕組みについて、考えに考え抜いて欲しかった。若さだけではまだまだ甘い。

NsBC流通指導部長
石本 和治

事業化へ期待感

熱意ある学生の皆さんの発表に心打たれるものがあり、企業支援とは違った喜びを感じた。日本の「モノづくり」や起業への可能性に希望を感じた次第。審査は非常に順調に進み、選ばれた発表はどれも優れており今後の事業化に期待できる内容が多かった。できればこうした内容やその記述、発表などを参考に、より多くの学生の方々に挑戦してもらいたい。

ビジネス部門

サントリー文化財団上席研究フェロー
佐藤 友美子

言葉に力あった

今年も魅力的な提案が多かった。提案内容はもちろんのこと企画書やプレゼン資料の質が高く、並みの企業人の域はすでに超えている。その中で審査員の心をつかんだのは、自分の足元を見つめる中から生まれた提案である。〝頭でっかち〟ではなく、身体感覚を伴っているのでプレゼンの言葉に力がありインパクトがあった。

今年のビジネス部門で最優秀賞に輝いた「Smile Dish～外国人旅行者とランチ留学～」は、既存の価値観、その際、誰に、どのような商品や技術を、どのようにして開発、製造し、販売したいのか、明確に提案してもらいたい。さらに新規・独創性、市場性だけでなく競合や、競争優位性を熟慮されることを願う。今後、ますます若い学生諸君の活躍に期待する。

上野流通戦略研究所代表取締役
上野 祐子

ニーズ対応充実

ビジネス部門は生活の中の学生らしい〝気付き〟をテーマとしたものが多かった。語学や就活、美容、旅行、加工技術、食品等を機軸に、サービスカスタマイズやネットワーク化を図ることで、利便性や効率性、ニーズへのジャストフィットを狙うものが目立った。

利用者双方にとってサービス価値が高い京都大学品川さんの「スマイルディッシュ」は、現実的なサービスビジネスとして練れている。人的サービス事業で重要なポイントは〝ターゲティング〟と、そのニーズが生まれる市場背景・経緯・エリア特性を徹底的に調査・把握すること。今回はサービス価値向上のために競合他社や業際ビジネス等の徹底比較や現状分析が不足したプランが散見できた。事業周辺のリサーチ・競合比較分析力をつけて競争力のあるプランを今後も期待したい。

ニュービジネス・起業研究所代表取締役
佐藤 宏

プレゼン、上達

「CVG大阪」は今年で14回目を迎え、28大学・専門学校から233件もの応募があった。初回から審査を担当して来て、今回感じた点は全員のプレゼン技術が格段に上達した点。事業化の意思がある良いテーマが増えたものの、最も大切な収支計算で杜撰（ずさん）な提案がいまだ散見された事である。ただビジネス部門最優秀賞の京都大学品川皓亮君ほか9名の「Smile Dish～外国人旅行者とランチ留学～」は、外国人観光客と市民をつなぐ京都の学生ガイド〝Meet Us Kyoto〟を母体に2013年春法人化を目指す新しい観光のカタチ創りの具体的な提案だった。すでにボランティアで助走して来た経験を踏まえた事業採算・収支計画は緻密で妥当。観光都市京都から近畿圏、全国の大学への展開計画も堅実で成功を祈念したい。

ビジネスインテグレート代表取締役
萩平 勲

採算計画が重要

本年は上位に入賞した提案はすでに実践しているものや、研究をして試作が成功しているものばかりであった。頭で考えただけの提案や、みんなで知恵を出したものの、経験や知見がないものは説得力に欠けてしまい、具体的な提案になっていない。

また、ビジネスプランであるから、採算計画は必須であるが、ほとんどの提案でおろそかになっている。販売が伸びればコストが下がり、販価を下げる余裕ができ、需要の拡大と後発の競争業者に対して優位に立つなどの計画が見られない。これでは〝新商品アイデア〟にとどまってしまう。

学生であるから、「ビジネスプラン」の意味を勉強してほしい。

大阪経営イノベーションオフィス代表
清水 利男

独創性が重要に

今年で14回目を迎えるキャンパスベンチャーグランプリ。年々、現実的な提案内容が増え喜ばしい限りだ。中でも、時代を映しソーシャル・ネットワーキング・サービス（SNS）を駆使した提案がテクノロジー・ビジネス両部門で見られる。可能ならば、日本のモノづくり技術が生かされるアイデアを期待したい。

ただ、情報通信技術の発展は止まることなく進化し続ける。ビジネスプランへの採用や技術応用が避けて通れない中、可能な限りアイデアに独創性を発揮することが重要になる。学生諸君には大学や個人が有する特許および実用新案を実用化するシステム、プランの創出に挑戦してほしい。

第14回キャンパスベンチャーグランプリ大阪 受賞者一覧

（＊グループは代表者のみ掲載）

◆最優秀賞（2点）

●テクノロジー部門
▷「〝内視鏡医療の新しいカタチ〟レーザーを用いた新・ドラッグデリバリーシステム」＝中山智詞（大阪大学大学院）

●ビジネス部門
▷「Smile Dish～外国人旅行者とランチ留学～」＝品川皓亮（京都大学）

◆優秀賞（2点）

●テクノロジー部門
▷「教育用ロボット制御モジュール開発『ROBOTICS：NOTES』」＝立花京（立命館大学）

●ビジネス部門
▷「Photrip～新感覚のトラベルマップ共有～」＝堀切川和也（和歌山大学）

◆特別賞（4点）

＊近畿経済産業局長賞
▷「飲み物に視覚的な楽しさを付加する事業『PERORI』」＝砂子翔（京都工芸繊維大学）

＊摂津水都信用金庫賞
▷「中小企業における共同設置・運営型事業所内保育所コンサルティング事業」＝井上友希子（京都女子大学）

＊日刊工業新聞社賞
▷「Make it!! Japan」＝須藤勇人（大阪大学）

＊大阪産業人クラブ賞
▷「全固体紫外レーザーの高出力化・長寿命化を可能にするAl添加CLBO結晶の開発」＝高千穂慧（大阪大学大学院）

◆佳作（3点）

▷「エノキタケを原料としたバイオリファイナリー事業モデル提案」＝中地学（関西大学大学院）
▷「きっとやれる子―ワイヤレスチェーン―」＝松谷栄輝（阪南大学大学院）
▷「ヒューマンセンサーを用いた自転車捜索サービス」＝田中美帆（大阪経済大学）

◆奨励賞（3点）

▷「IT技術者の育成のためのプログラム自動採点システム」＝谷宏太（近畿大学）
▷「家庭教師ソーシャルネットワーク」＝CHU BAO TRUNG（奈良先端科学技術大学院大学）
▷「外国人観光客に向けた『real food』提供サービス」黒川貴大（京都産業大学）

◆努力賞（4点）

▷「ソーシャルネットワークを活用した就職活動支援」＝吉田俊也（関西大学大学院）
▷「コンビニとソーシャルゲームとの連携」＝真砂吉将（HAL大阪）
▷「One to Oneで広告経費を削減！！～ポイント管理プラットフォームの提供～」＝佐藤優介（神戸情報大学院大学）
▷「ブランド横断型一元管理システム～何度も気軽に通える百貨店コスメ～」＝小川絢加（武庫川女子大学）